

書評

藤本大士 著

『医学とキリスト教——日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教——』

日本における近代医療の発展に、キリスト教医療宣教師のかかわりがあることは早くから知られていた。日本の医療の近代化・発展に彼らはどのように寄与したのか。異文化（外国人医師）との接触は、現地文化にとって刺激となり、影響を与えてゆく。医療における異文化の代表は、政府に雇用されたいわゆる「お雇い外国人」と民間での「医療宣教師」であろう。このうち、前者は官立でもあり研究は進んでいるが、後者においては十分に行われているとはいいがたい。それは医療と宣教の2つの領域にわたる、いわゆる学際的な領域であり、両分野の豊富な知識が求められるからである。彼らの活動は、現在も活躍している聖路加国際病院、大阪の聖バルナバ病院などにみられることから、現代の日本の医療の成り立ちの理解につながる。

それは筆者の研究領域である日本における看護教育の発展にもかかわっている。筆者はかつて日本の最初期の看護教育に大きく関係した米国長老教会女性宣教師 M.E.リードについて、その人物像、教育的背景を研究したことがある。資料として横浜開港資料館で書簡のマイクロフィルム、英字新聞、伝道局の年報などを調べた。またアメリカ長老教会歴史資料館や国会図書館などにも出向き調査した体験がある。しかしこのときにはまだこの研究のバックグラウンドとなるような本書のような概説書はなかった。本書の先行研究として、長年、来日医療宣教師を研究されていた本学会関西支部の長門谷洋治先生、小檜山ルイ氏のアメリカ女性宣教師研究、キリスト教史学会の中島耕二氏のインブリー研究や筆者のリード研究なども含まれている。

内容は9章で構成されて、第1章 医療宣教の始まり、第2章 医療宣教の広がり、第3章 医療宣教の変化、第4章 女性医療宣教師、第5章 宣教看護

婦、第6章 セブンスデー・アドベンチスト教会の医療宣教、第7章 アメリカ聖公会の医療宣教、第8章 民間からの戦後医療改革、第9章 戦後の医療宣教、終章 医学史・ミッション史におけるアメリカ人医療宣教師、となっている。

日本における最初のアメリカ人医療宣教師として1859年、ヘボンが来日した。日本は政府の方針としてドイツ医学の採用を決定し、ドイツ人医師が来日し日本人医学生への指導にあたった。このドイツ人医師の活躍、影響の研究はあるが、アメリカ人医師（ドイツ人より多い）の包括的研究は行われていない。医学史だけでなく、ミッション史でも包括的には行われていない。その理由は医療宣教は副次的な活動で、宣教師の本務はキリスト教の布教にあるからである。

本書の研究内容は、幕末からアジア太平洋戦争まで、アメリカ医療宣教師の活動の全体像を明確化することにある。日本でドイツ医学の影響が強いなかで、なぜ彼らは活動を続けることができたか。今回はアメリカのみを取り上げ、宣教看護婦も含めている。先行研究では医学史では、長門谷先生以降の研究はなく、同氏の研究では、医療宣教師の活動の見取り図を示すがその日本医療史における位置付けは行われておらず、医療宣教師の全体像をとらえる包括的研究が必要である、とクリティークしている。他の宣教師が活躍した分野として地方高等教育史、ジェンダー史研究の分野からのアプローチもあり、周辺領域のこれらの研究も視野に入れている。

研究目的は、アメリカ医療宣教師の活動を医学史・ミッション史の2つの観点から分析することで、医学史においては医学教育、医療実践の歴史を、ミッション史では宣教が進むなかでなぜ医療活動に従事し続けたのか、の視点で明らかにすることにある。研究資料は、アメリカに赴き、原典

資料にあたっている。各ミッションの年報、議事録はイエール大学、ハーバード大学に所蔵のマイクロフィルム版・電子版を使用。日米の新聞・雑誌資料、医学雑誌、宣教師の出身校の紀要なども参照している。各派の新聞・雑誌記事は『近代日本キリスト教新聞集成』で、教会や人物の履歴、キリスト教用語には『日本キリスト教歴史大事典』を、聖書は『聖書 聖書協会共同訳』を活用している。現在の「看護師」は「看護婦」を使用するとしている。

研究でわかったこととして、来日アメリカ医療宣教師の1) ミッション内での役割の変化、2) 医学教育への関与、3) 日本人医師との差別化、4) 医療とキリスト教の総合史にむけて、の4点があげられている。戦後のアメリカ医学導入の伏線として、明治初期から太平洋戦争まで、彼らの医療が身近にあったことの意義、そして現在も継続していることの意義が述べられている。

看護史とキリスト教では、マルコによる福音書の6つの慈善のなかに看護が入っていることから関係がある。長門谷先生が研究されていた、リード、ツルー、リチャーズの活動は、日本の最初期の看護教育を行った3校にかかわる。しかし現在

もリードの教育的背景はわかっていない。ここがわかれば日本の最初期の看護教育がどのような影響を受けてスタートしたかがわかる。

藤本氏は学際的な領域にチャレンジし、包括的な研究を行った。本書はこれから医療宣教師研究を行う研究者への便宜、背景の理解、手引となる価値を持つ。今後はさらに保健分野との関係、公衆衛生、保健所、保健師の分野にも注目してほしい。また宣教師は、日本の幼児保育、学校教育、音楽史（讃美歌）にも影響を与えており、周辺領域の研究にも継続した目配りが必要である。

著者の藤本氏は若手の科学史研究者で、本書で日本医史学会より2022年矢数医史学賞を受賞している。経費には研究助成金を活用している。今後は、さらにカトリック側の医療宣教、アメリカ以外の宣教師の活動、日本への宣教の特徴（中国宣教との違いなど）も課題となろう。

(平尾真智子)

[法政大学出版局、〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎内、TEL. 03(5214)5540、2021年8月、A5判、448頁、5,800円+税]

W. ミヒェル 編

『蘭語訳撰』（逆引き版）

外国語の学習には辞書が欠かせない。それは、読む、書く、話す、いずれの場合でも同様である。江戸時代には、後の2つの用途は長崎通詞か、ごく限られた蘭学者以外には考えられなかったろう。蘭人との接触を必然とし、またある程度の蘭語修得済みを前提としているからである。世に言われる蘭僻大名には種々のタイプがあるが、中津藩主奥平昌高は『蘭語訳撰』と『バスタールド辞典』という2種の辞典を編纂した。『蘭語訳撰』は文化7年（1810）に刊行された日蘭辞典であり、そこに出る蘭語の単語をアルファベット順に、すなわち蘭日辞典として組み替えたものが本書である。「逆引き」と称する所以である。

『蘭語訳撰』に出る総数7072の語句をABC順に並び替え、それぞれのオランダ語に元来の見出し語とその読み（ルビ）を配当し、しかも巻数や後述の部門名、それに書き入れられた蘭語を付すという作業に、細心の注意、多大の時間と労力を払われた編者ミヒェル氏に敬意と感謝の念を表したい。

本書（全324頁）は解題76頁、逆引き辞典本体が246頁、索引2頁の構成である。ミヒェル氏による解題は、いつも通り手堅く新情報に富む。11項目にわたる解題（各項長短あり）は、辞書編纂の時代的背景に始まり、『蘭語訳撰』編纂の立役者奥平昌高、神谷源内、馬場佐十郎3名の相互関連と出版への事情を記し、最後にヨーロッパへの伝